

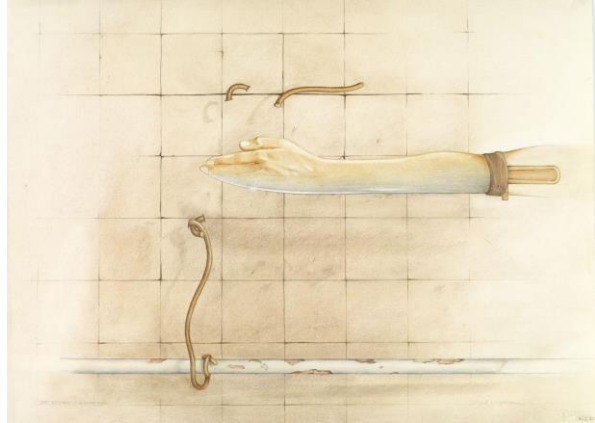
ビルギット・ユルゲンセン展
ファーガス・マカフリー東京

9月28日（金）～10月27日（土）

ファーガス・マカフリー東京は9月28日より、革新的な作品を生み出したオーストリア人作家ビルギット・ユルゲンセン(1949-2003)の紙と写真作品による個展を開催致します。

「ビルギット・ユルゲンセン」展では9点のドローイング、展示の機会が非常に少ない70年代のマルチメディア・コラージュ作品、80年代後半から90年代前半の写真作品および写真をベースとしたコラージュ作品をご紹介します。

作家がどのように素材と制作プロセスを捉えていたかという点に焦点を当てます。これらの作品を一堂に展示することで数十年にわたって作家が探求し続けた表象、皮肉、オリジナリティを明らかにし、彼女の独創的なドローイングと写真における実践がいかにお互いを特徴付けていったのかをご覧ください。



ユルゲンセンはドローイングや描写の手法を学術的に学び、それらをフェミニズム、精神分析論、構造主義など、同時代的な問題を取り扱うのに応用しました。1971年、ウィーン応用美術大学卒業後のユルゲンセンは、ウィーン・アクションリストの暴力的で逸脱した男性性、そして保守的なオーストリア・ブルジョワに支配されたウィーンのアートシーンの中で居場所を見つけられずにいました。そのような状況の中、彼女はプライベート・スタジオに閉じこもり、パフォーマンス、写真、彫刻など数多くの非常に豊かな作品群を発展させていきました。



1970年代前半、ユルゲンセンはシュルレアリスム的な視覚言語を用いてジェンダー、家庭主義、社会生活といった同時代的な問題を提示する夢幻的なドローイングを描き始めます。古典的な裸体像のシルエット、人気ハリウッド映画のスティル写真、本や雑誌等から切り出したイメージ、また彼女自身が撮った写真の一部など、実に多様なものからイメージを引用しました。本展では今まで語られることのなかったユルゲンセンの制作と、1970年代後半から80年代前半ニューヨークを拠点に大衆文化・マスメディアで流用された、イメ

ージを内省的に検証したピクチャーズ・ジェネレーションとの関係性を探求します。ハフィフが行ったイメージをサンプリングし再結合することに対する態度は、表象、オリジナリティ、流用に関わる問題への彼女の強い関心を示しています。



今回出展する 1971 年から 78 年の紙を支持体とした作品群は、ユルゲンセンの芸術的実践において見受けられる形式主義的抽象とシュルレアリスムの図像をたどります。古典的な製図法を用いながら、ウィーンの豊かな美術史的伝統を深いレベルで取り扱っています。例えば《The Echo in the Mountains》(1970) はエゴン・シーレとグスタフ・クリムトの繊細なマークメイキング、人体に対する革新的なアプローチ、線の巧みな使い方に喚起され生まれた作品です。また、《To Cut Through the Knot》(1976) も同様に

人体を複雑化しています。これは、ユルゲンセンがいかに複雑さと皮肉をもってフェミニスト的な文化批判を取り上げていたかを表しています。ここでは、線は構図および主題の要素、両方として探求されています。古典的な作図において線は、理性と結びつけられ、空間の中に存在する物体や身体に輪郭（定義）を与える人間の能力を表します。一方色彩は、より無定形かつ主観的と考えられ、身体的体験や女性性と関連付けられます。《To Cut Through the Knot》では、腕がナイフに変容してながら紐の直線を断ち切るプロセスを描き出し、思考の冷たい合理性を身体の意味が妨げる様を描いています。

今回出展されている写真作品は、様々な実験的なプロセスを経て制作されました。多重露光、化学処理、光投影法を用い、ユルゲンセンは描画と写真的技術を融合させるのです。90年代前半のコラージュ写真の作品では、写真の理性的なグリッド構成の上に、ストッキングのような網状の布が覆いかぶさっています。透明な素材の層が介在することで、幻のような知覚性の戯れの中でイメージが重なり、鑑賞者の見る位置によってその見え方が変化します。リネンに印刷された 1988 年の写真群では、臃げな人体の輪郭と流用されたイメージとが互いに浸透しています。《Untitled (my nephews)》



(1988) では、主体となっている身体はその不在によってのみ存在しています。地と図の堺は、影と光、輪郭と細部の無定形のグラデーションの中へと崩れていくのです。

展示に含まれる3つの写真と素描のコラージュ作品では、同様にシュルレアリスムの視覚言語を掘り下げ、それを構造主義の言語理論に応用することで具象と抽象の複雑な関係性を探求しています。これらのコラージュ作品において、作者は私達に固定され安定性をもつ写真というイメージを提示しながら、同時にそのイメージの安定性をもたらす要素をドローイングによって破壊するのです。このようなアプローチは、のどかなサバンナ風景の写真を微かに分解する《Untitled》(1976)で明確に現れています。ドローイングの中の象の姿では、体を覆うべき皮膚は存在せず、それは代わりにまるで衣服のように木の枝に巻き付けられ、そこから付属品として牙が芽吹いているのがみえます。

2013年の初個展以来、ファーガス・マカフリーでは4度目のユルゲンセンの個展であり、今年3月にオープンを迎えた東京スペースの3つ目の展覧会となります。本展覧会終了直後の2018年11月10日から2019年2月17日まではチュービンゲン美術館にてユルゲンセンの大規模な回顧展が開催されます。

ビルギット・ユルゲンセンについて

1949年、ウィーン（オーストリア）生まれ。1968年から1971年、ウィーン応用美術大学で教育を受けたビルギット・ユルゲンセンは、1970年代に世界中で起きていたフェミニスト・アヴァンギャルド運動の重要な役割を担いました。生前ほとんど注目を浴びなかった彼女ですが、ガブリエル・ショアとアビゲイル・ソロモン＝ゴドーが執筆したモノグラフを契機に、その深く幅広い美術的な功績が広く認知され始めました。1978年ウィーンのアルベルティーナ・グラフィックコレクションにてドローイングの個展を開催、1980年から1997年はウィーン応用美術大学とウィーン美術アカデミーで教壇に立ちました。ユルゲンセンの作品への理解はヒューベルト・ヴィンター・ギャラリー（ウィーン）の活動によって1981年より広がり始めます。

2018年11月から2019年2月までチュービンゲン美術館ではユルゲンセンの大規模な回顧展「ICH BIN / I AM」が開催されます。また2019年の夏、ルイジアナ近代美術館での展覧会への作品出品が決まっています。

ファーガス・マカフリーについて

ファーガス・マカフリーは2006年の設立以来、元永定正、中西夏之、白髪一雄、高松次郎など、日本戦後美術の国際的な評価を確立させる上で中心的な役割を担ってきました。マーシャ・ハヒフ、ビルギット・ユルゲンセン、リチャード・ノナス、ジグマー・ポルケ、カロール・ラマなど独創性に富んだ気鋭の西洋作家の作品展示も行っています。

日本美術と文化への貢献を続ける中で、この3月東京に拠点を構え、ロバート・ライマン展とともにオープニングを迎えました。

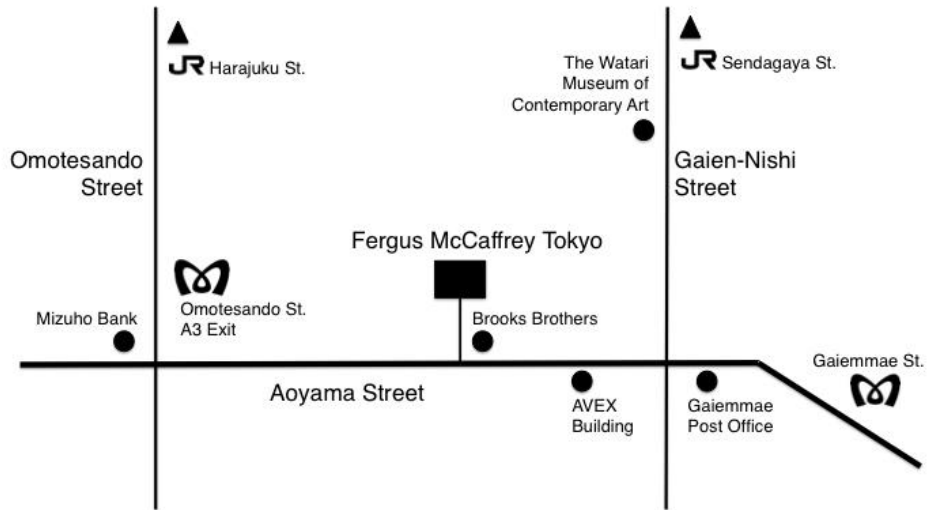
プレスのお問い合わせ：

ファーガス・マカフリー東京

Tel: +81 (0)3 6447 2660

Email: tokyo@fergusmccaffrey.com

ギャラリーマップ



Images:

1. Birgit Jürgenssen, *To Cut Through the Knot*, 1976. Pencil, colored pencil on handmade paper, 17 5/8 x 24 5/8 inches (44.9 x 62.6 cm). © Estate Birgit Jürgenssen, Vienna; Courtesy Galerie Hubert Winter, Vienna
2. Birgit Jürgenssen, *The Echo in the Mountains*, 1977. Pencil, colored pencil on handmade paper, 24 5/8 x 17 3/4 inches (62.5 x 45 cm). © Estate Birgit Jürgenssen, Vienna; Courtesy Galerie Hubert Winter, Vienna
3. Birgit Jürgenssen, *Untitled (my nephews)*, 1988. Black and white photo on linen, 38 1/5 x 38 1/5 inches (97 x 97 cm). © Estate Birgit Jürgenssen, Vienna; Courtesy Galerie Hubert Winter, Vienna
4. Birgit Jürgenssen, *Untitled*, 1976. Collaged photo, colored pencil on Schoeller handmade paper heightened with white, 17 1/4 x 24 3/5 inches (43.8 x 62.5 cm). © Estate Birgit Jürgenssen, Vienna; Courtesy Galerie Hubert Winter, Vienna